

ホトトギス

昭和二十四年二月二十八日運輸省特別授受承認証第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十六年九月一日発行(第百七巻第九号)

ホトトギス

九月号



旬日記

汀子

平成十五年九月二日 ロイヤル俳優

木洩日の揺れ水引の花隠す

初月に空を譲らぬ火星かな

庭の木々素通りしたる野分かな

一茎の孤高水引草の紅

滞在に倦むことこのなし露けしや

九月六日 芦屋ホトギス会

わが庭をよるべとしたる秋の蝶

秋潮の香に結界のなかりけり

露踏みて集ふ心のありにけり

九月七日 関西野分会

待宵の心重ねて忌日来る

鶏頭や語る歴史も百年に

満ちてゆく心待宵なりしかな

九月七日 下萌句会

露けしや忌日の巡り来ることも

居眠りの半分占めし夜学かな

風音を閉ぢ込めしとき芭蕉林

露しとどなる早発でありしこと

露けしや火星夜々速ざかりゆく

九月九日 大阪倶楽部

九月十一日 清交社

露置きて朝の時間の経ち易く

露けしと朝の旅立声かけて

稿債として萩の一枝の加はりぬ

月今宵明日上京の荷を纏め

乱れ萩なりに枝垂れてをりにけり

咲くよりもこぼる萩の白さかな

勝負気になりつゝ燈下親しめる

露葎しとど濡れつゝ剪りしもの

九月十二日 工業倶楽部

風癖のまま活けられし芒かな

鈴虫に夜の静寂の深まりかな

穂を解きし芒の占めし狹庭かな

九月十三日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

露けしや二度寝三度寝旅の朝

立待の月よりこぼれ来たる雨

九月十六日 有恒倶楽部

コピー機のうしろに逃げし秋の蚊よ

又逃げし秋の蚊に稿乱さるる

あなどれぬ所在秋の蚊なりしかな

旅の月はや欠けせめし家路かな

松手入済みたる庭に火星見る

柳の如夜長の稿に向ひけり

九月十九日 時雨会

一本の欠かせぬ供華の吾亦紅

お隣の又釣り上げし鯨の竿

野を統げてゐしは結局吾亦紅

雨止んで月の所在のありそめし

旅宿に雨月の顔の揃ひたるぬ

この蕉の潮一人占してをりぬ

九月二十日 句会と講演の会

蜻蛉の空と気づきしより仰ぐ

台風の際引き寄せてしまふ雨

忌日なる子規の墓前に五六人

九月二十一日 野分会

鶏頭を供へ歴史の中歩く

九月二十五日 きざらぎ会

露風を先立てて来りけり

九月二十七日 中国ホトギス同人会

秋晴の極まりし空旅のもの

弓道部 極まりし秋の汗光る

露の世の故事と伝へて鬼退治

秋晴を得しよりまこと旅心

九月二十八日 中国ホトギス俳句大会

歩かれよこの爽やかな朝の道

一キ口は歩ける距離よ鳥渡る

誰彼に会ふが消息爽やかに

九月二十九日 西播磨天文台火星を見る会

秋時雨雲が火星を近づきぬ

露けしや火星の距離を聞きしより

生活の灯届かぬ高さ星月夜

九月三十日 第二句会

星消してゆく霧も又過客かな

秋灯のロクジ睡らぬ一と所

邂逅は夜空にもあり星月夜

旅一夜寝なくともよし星月夜

快晴の朝の消しゆく星月夜

霧消きま岳麓の旅終る

山荘の霧に沈めし忌日かな

霧動きはじめ忌心深きかな

夜学の師有季定型先づは説く

霧消きま岳麓の旅終る

霧消きま岳麓の旅終る

携帯用椅子

稲畑汀子

「ねえ、由美ちゃん。家の前の道を通つ直ぐ北へ行った43号線の角に、大きな釣り道具を売つてる店があるわね」

「ええありますよ。中へ入ったことはありませんけれど」

週に二回手伝いに来てくれる由美ちゃんは亡くなった森本さんの娘さんで虚子記念文学館へアルバイトに来て貰つてもいるので最近はその相談相手をしてくれるようになった。

「考へてるのだけど……、座椅子で座り心地が悪くなくてお座敷でも使えるのはいかしら？ あ釣りの具屋さんに案内あるように思うのだけど……」

「じゃあ、こちらに来るとき覗いてきます」

「今から行つてみてよ」

「じゃあ、行つてきます」

娘の頼子と同じ年なので気軽にものが頼める。

早々仕事を終えて釣りの具屋さんへ行つてくれた由美ちゃんが見本に買つてきてくれた椅子は、筒型の袋に入つていて肩に掛けるのと楽々持ち歩きが出来る袋に納まつたものである。袋から取り出すとがっちりしたパイプの脚の四本が開いてドンゴロスのようなしつかりした布で背もたれ迄ある。

「先生は紺色がお好きだから紺にしましたが、濃い緑も綺麗ですよ」

「素敵じゃないの」

「……でしよう？」

「うん、気に入つた！ 高いのでししよう？」

「幾らか当てる下さい」

「まあ、釣りの具屋さんだから……、でも五千円以上はするでししようね」

「先生、売つてあげましよう」

「あら、もつと安いのか？」

「千四百円……」

「え？ 本当なの」

「それに消費税がつきます。千四百七十円になるでしようか」
「我が家の日本間で句会をするときこの椅子があればいいわね。」

思い切つて三十脚注文してよ」

「？」

早速尋ねる電話を掛けてくれた。

「三十脚揃えるのに少し時間がかかるのだそつです。でも一週間に内に届けて貰えるそつです」

「よろしく」

応接間の横にあるスペースに三十脚納まつた携帯用椅子は早速使うことになつた。虚子記念文学館で開催した『那智の森プロジェクト』のあと小さな音楽会をするためにこの三十脚が活用する事が出来た。

「座ってみて下さ〜」

我が家に来られる人達は皆一度は座らされた。

「わー座り心地がいい椅子ですね」

「八十キロまで大丈夫だそうですよ」

吉野山へ行く時も全員が座れるように車に積んだ。椅子のパイプに脚には直径五センチほどの平らなガードが付いている。宿の奥さんにそれを見せて使う許可を貰った。

「いいですよ。どうぞ使ってください」

「ありがとうございます」

句会の準備をするひろさんと桂子さんに手伝って貰い、小さい椅子が並べられた。

「わあ、うれしいなあ」

座るのが苦手な人達が結構多いのを知った。

「でも、この椅子は八十キロまで大丈夫だけど、八十キロを超えている方はいらっしゃいますか？」

「はーと」

保佳さんが手を上げた。

「保佳さん、何キロ？」

「私は九十キロです」

「じゃー保佳さんは宿の椅子に座ってください」

しかし何度も句会をしている内に何時の間にか携帯用の椅子に保佳さんも座っている。

「まーいいわ。壊れても千四百円だもの」

九十キロの巨体もすっぽり納まってしまった。

廣太郎句帳

廣太郎

蕉翁の裾に逃げ込む秋日傘
曳船にちよこんと赤き秋日傘
九月六、七日 熊野古道遊歩俳句大会
優勝の余韻夜食にをさめけり

九月六、七日 熊野古道遊歩俳句大会

九月二十日 ホトトギス社句会

この道を二人で歩む夜の秋
法師蟬杉の鼓動を深くせり
笹百合の一輪ほどの静けさに
秋蝶の纏れて熊野淋しめず
杉の秀を分けて秋蟬鳴き綴る
九月十一日 土筆会
十六世宗家秋裕で句座へ
赤蜻蛉火星に色を貰ひしか
獺祭忌寿命百年てふ此岸
タイガース優勝に舞ふあきつか
九月二十三日 日本伝統俳句協会埼玉部会

九月十一日 土筆会

白萩の風に抗ふ角度かな

平成十五年九月一日 夢三忌全国俳句大会
纏れてももつれても秋蝶の黙
一瞬といふ湖霧の去来かな

鱚雲胴上げいよよ迫り来て
九月十三、十四日 日本伝統俳句協会全国大会
ザビエルにフランシスコに秋日落つ

秋の山秩父の色に染まりけり
男坂虫の囀してをりにけり

木々揺るゝことなく霧の揺れてをり
九月三日 一水会

火星には立待月の従はず
戦国の城泰然と雁渡る
九月十六日 草木瓜合同句会

七寺に七草配し瀟の寂
九月二十四日 若水会
蟪蛄の司教のごとく枯れにけり
赤い羽根つけて社長でありにけり

花野忌といふ明るさに今年又
それぞれに羽音沈めて大花野

とんぼうの目線に浮いてをりにけり
一夜明けあきつの増ゆる甲子園
赤蜻蛉空染めてゆくそめてゆく

無月とて酒は欠かせぬ漢かな
赤い羽根黄色い声に誘はれて
甲子園無月の下の勝利かな

九月四日 蕉心会
木々の皆疲れてをりし葉月かな

とんぼうの目線に浮いてをりにけり
一夜明けあきつの増ゆる甲子園
赤蜻蛉空染めてゆくそめてゆく

九月二十七日 中国ホトトギス同人会俳句大会
見下せば桃の流れ来て来たる川

天帝の威に怯えぬるビル夜長
夜業終へれば大荒れの丸の内

萩揺るゝほどの雅でありにけり
とんぼうに画布となりゆく茜空

吉備の山粧ひ初めてをりにけり
音色澄み吉備津神社の虫らしく

夜学の子阪神戦を気にしつつ
色草に大川端の風やさし

とんぼうに画布となりゆく茜空
九月十八日 登高会
夜食食べながら六甲おろし聞く

吉備の山粧ひ初めてをりにけり
音色澄み吉備津神社の虫らしく

穂芒に風道白く彩られ

夜食食べながら六甲おろし聞く

吉備の山粧ひ初めてをりにけり
音色澄み吉備津神社の虫らしく

雑詠 汀子選

暖かや外に出て知る家居あり
 草の芽の力欲しけり病後の身
 暖かややりたきことの多くなる
 花冷をつのらせてゐる月明り
 乗り越えし日々を語らひ夜桜に
 帰宅するまでは気づかぬ花疲
 水星といひ木星といふ臚
 一ひらの桜こぼれてひとりかな
 たちまちに別れの落花とはなりぬ
 シンポジウム終へたる朝の初桜
 湾深く遅日の波の寄せるのみ
 丹後より日永の山はみやこまで
 雲雀野に地球は丸さ失へり
 揚雲雀空が包んでゆきにけり
 曲水の宴言の葉を流しをり
 みよし野の春曙の月うつつ
 みよし野の花曙の静心
 白鳥の歌に吉野の花詠まむ

東大阪 東野一彌

同

秋田 浅利恵子

同

同

東京 今井千鶴子

同

同

樞原 稲岡 長

同

同

東京 稲畑廣太郎

同

同

京都 安原 葉

同

同

一步踏み出せし学習森芽吹く
 満開の花下の冥さといふものを
 朝桜旅の終りに誰も触れず
 咲き暗む桜大樹となりしかな
 闇をもてつゝみきれざる桜かな
 ぬばたまの夜を白々と落花かな
 惜春の一語もて足る心いま
 三人が子沢山の世子供の日
 母の日や何もいらぬと老い給ひ
 尼様をとどめて朝の諸葛菜
 奈良坂の花に流しの人力車
 み吉野の花の浄土に目覚めけり
 御所車動き出すより賀茂祭
 薄暑より雨降り出して来りけり
 座りゐて革座布団と気づくまで
 山法師雲居なすかに好古園
 花畳七重八重なす山法師
 退院の妻にまつはる子猫かな
 花の露こぼれ別れの朝がくる
 来年の天気も予約花の宿
 鶯の訛る吉野に別れけり
 灯のひとつひとつに宿る臚かな
 ひとりなら退屈二人なら長閑
 行方なき柳絮の旅の終りなき

神戸 山田弘子

同

龍ヶ崎 今橋真理子

同

神戸 三村純也

同

同

八尾 更谷芳川

同

同

京都 粟津松彩子

同

同

同

姫路 桑田青虎

同

同

狭山 大久保白村

同

同

東京 長山あや

同

同

雑詠句評（八月号より）

虚子館は私の里山梅香る 東京 稲畑廣太郎

一步・雅・暮潮

弘子・昭代・比奈夫

仁義・小木菟・基子

純也・汀子

登るほど谷に落ち込む花の雲 京都 安原 葉

登るほどにとあるので花の山または山桜を詠った句であろう。

そして咲きつらなっている遠目の桜の花として「花の雲」という季題が出て来たことはおそらく吉野桜を詠ったと思われる。咲き満ちつらなっている溢れるような桜の色が山を登ってゆくにつれ、むしろ谷に落ち込んでゆくように見えたというのである。

「花の雲」という季題を見事に捉えた写生句である。（一步）

山を登って行くに従って桜の情景が変化する。それは下に見たり上を仰いだりしながら作者の動きの変化が想像される。この情景は吉野山であろうか。花の雲を高い所から見下ろす花の谷の雰囲気を味わう臨場感が感動となって伝わって来る句である。

（汀子）

「虚子生誕百三十年記念講演那智の森」当日の出句。虚子記念文学館が設立されて四年が経つ。創立当初から関ってこられた作者にとつては、幾度となく、東京から通つてこられたであろう虚子館である。冒頭の講演会の折も、虚子館を訪れた作者。その日が、曾祖父・虚子の誕生日であつたことも相俟つて、作者にとつての虚子館の存在は、もう里山と言えるくらいの思いに膨れていよう。館を包む梅の香りの懐かしさがよけいにその思いを深めたのであろう。何らかの形で、ご自身が支えていかなければならぬであろう虚子記念文学館に寄せる熱い思いも伝わる。（雅）

虚子記念文学館は平成十二年二月二十二日に芦屋市平田町にオープンした。今年は五年目となる。虚子の生誕百三十歳に当る日を記念して祝つた会に作者も出席した。作者が記念館を里山と感じるのも、馥郁とした梅の香りに誘われたからかも知れないが作者にとつて生れ故郷であるこの地に親しさがあるのである。

（汀子）

（以下略）

若水集

廣太郎選

子供の日・若楓

み吉野のいつも脇役若楓 東京 桑野英彦
 蒼空に朱を刷きそめし若楓 同
 老唄ふ寮歌に和して若楓 同
 一束の風の門あり若楓 八尾 岩垣子鹿
 若楓風の起伏を変へてをり 同
 揺れ戻るときやや冥し若楓 同
 虹の間の玉座に近し若楓 明石 中杉隆世
 玉座よりみそなはず庭若楓 同
 雨弾き雨に弾かれ若楓 同
 疲れたることに満足子供の日 愛媛 三瀬教世
 子供の日親子げんくわに始まりし 同
 姿よき枝をかくして若楓 同
 若楓くぐり出でたる風の色 神戸 山田弘子
 溪流も人声も染め若楓 同
 子供の日貧しさ知りて育ちし子 同
 枝先を風に遊ばせ若楓 横浜 藤木和子
 音のなき風の通へる若楓 同
 父と子と雨を見てゐる子供の日 同

橋脚より仰ぐ日強し若楓 千葉 増田善昭
 葉の先は山の色なる若楓 同
 子供の日フォークダンスの輪が廻る 同
 若楓宿す雨滴に日の微塵 名古屋 伊藤まさ子
 雨雫プリズムにして若楓 同
 晴れてゆく風の在りかの若楓 同
 父の碑に影も明るし若楓 東京 柴原保佳
 玩具屋に縁なき暮らし子供の日 同
 今朝の雨塗りたての色若楓 同
 いつの間に将棋覚えし子供の日 大阪 林 直入
 子供の日半分パパの日でもあり 同
 案の定疲れ残りし子供の日 同
 暁けてゆく窓辺の雨の若楓 堺 辻本斐山
 若楓糠雨を遊ばせてをり 同
 狢犬の石のたてがみ若楓 同
 若楓チャペルの窓を輝かせ 東京 芳根元子
 雨粒は真珠となりて若楓 同
 賛美歌てふ美しきもの若楓 同
 荘々の往事憶へり子供の日 龍野 浅井青陽子
 いつの間に小城下かゝる若楓 同
 一と雨の欲しと思へり若楓 同
 空覆ひみて明るさの若楓 滋賀 成宮紫水
 幾重にも枝の重なりて若楓 同
 中学生らしくなりぬて子供の日 同

若水集句評 廣太郎

み吉野のいつも脇役若楓 東京 桑野 英彦

どうしても桜の名所としての吉野山を先ず想像してしまおうが、五月に訪れた作者である。「いつも脇役」とあるが、この時は主役としての「若楓」が目の前に迫ってくる。四月の桜との対比を示唆している表現ともとれるが、その対比がより季題を鮮明に描き出している。

父と子と雨を見てゐる子供の日 横浜 藤木 和子

平成十六年の「子供の日」、関東地方は雨のところが多かったようだ。父も休日で、子供とどこか屋外へ行く約束をしていたのだろう。ところが雨で、ただ呆然と窓の外を眺めている姿が想像出来何とも気の毒な景であるが、その仕種から、親子の絆を深く感じる事が出来る。

空覆ひゐて明るさの若楓 滋賀 成宮 紫水

この季節ならでは、多くの葉が茂り、地上からは空も見えな

いほどになっている季題の姿が見て取れる。しかし特に「若楓」の瑞々しい色が、辺りを暗める事なく却って明るく輝いているのである。文字通り全体が明るく、又若々しい葉色も目の前に見えてくる句である。

旅疲れ癒やす一日子供の日 田辺 峰山 清

普段から旅の多い作者なのであろう。子供連れで行楽に出かける、というイメージがこの日には多いが、反対にゆったりと寛いで家にいる姿から、ゴールデンウィーク最後の祝日らしさが見て取れる。尤もこの後土日が続くケースもあるが、やはり最後の祝日らしく詠む事でイメージが膨らむ。

若楓嵯峨野の雨に濡れもして 龍ヶ崎 今橋真理子

京都の力であろうか。秋の紅葉の景までが目の前に迫ってくる句であるが、いやこれは紛れもなく作者の力である。平明な表現の中に一部の隙もなく、見事に景が表現されていて、「嵯峨野」の地名が、より重要性を帯びてきている。花鳥諷詠の手本と成り得る句である。(以下略)